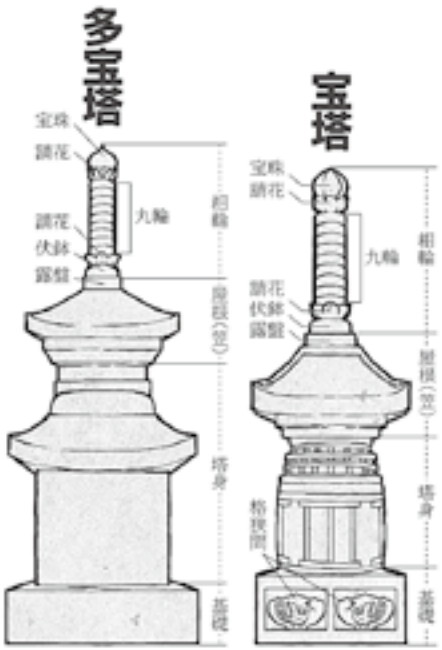
おしえて お墓■の話
石造美術オタクのひとり言 ③宝塔・多宝塔

高橋晋也／庵治産地の石材加工メーカーである㈲翼石材企画室に籍を置き、平成21年より、究極のこだわり製品として『世伝石塔』シリーズを開発、総合プロデューサーとして庵治・牟礼産地の優れた加工技術を持つ『庵治石工衆™』によって制作している。中世の石造物をこよなく愛し、今年4月からは、中世の石塔を中心に勉強をする会、『翼塾』を開講。

こんにちは、㈲翼石材・企画室の高橋です。今回は「宝塔」・「多宝塔」についてお話をさせていただきます。

在銘最古の石造宝塔は、鎌倉時代前期建仁二年（1202年）の茨城県桜川市の祥光寺宝塔です。また、石造宝塔の遺品は平安時代後期から見受けられ、京都市左京区の鞍馬寺宝塔や滋賀県大津市の長安寺宝塔、岩手県中尊寺の願成就院宝塔などがあります。平安時代後期から鎌倉時代前期の宝塔は非常に独特な塔形で見応え抜群です。

ちょっと自慢ですが、私の地元香川県では鎌倉時代前期頃からの石造宝塔（凝灰岩製）の遺品があり、どれも見応えのある素晴らしいものです。ぜひ、お時間があれば、香川県の石造物を見学してみてはいかがでしょうか。



はじめに、「宝塔」・「多宝塔」の形式について説明させていただきます。「宝塔」とは仏塔の建築形式の一つで、屋根が一重で胴体（塔身）が円形のものを指します。その「宝塔」に裳階（下屋、庇のようなもの）をつけて屋根が二重に見えるものを「多宝塔」と呼び、仏塔の建築形式として、一重の形式を「宝塔」、二重の形式を「多宝塔」と呼んで区別しています。ちなみに、現在の遺構・遺品としては、「多宝塔」は木造建築が一般的で、「宝塔」はほとんどが石造物や絵画・舎利容器の工芸品です。

また、形式上は「宝塔」・「多宝塔」と分けて呼びますが、語義としては、元来「宝塔」という名称はその形式に関係なく「宝の塔」ということですべての「塔」の美称として用いられます。

日本における宝塔・多宝塔の名称の由来・初見は、奈良・長谷寺の「銅板法華説相図（千仏多宝仏塔）」（国宝）と言われ、白鳳時代の遺品として有名です。その表面には「法華経」見宝塔品に基づく三重塔（三層構造）の多宝塔と、その塔の周囲には多数の仏菩薩像が表されています。下部中央には長文の銘文があり、造立の由来などが刻まれています。

ただし、この三重塔は、最上層・中層・下層の順に物語が展開するさまを表現しているだけで、塔の形式を示しているものではありません。

現在「銅板法華説相図」は奈良国立博物館が委託管理しており、時々展示されていますので、ぜひ足を運んでみてください。神秘的で思わず引き込まれる美しさです。

○

木造建築の宝塔・多宝塔の建立時期は平安時代に入って空海や最澄によるものが最初と言われています。

空海は宝塔・多宝塔を「毘盧遮那法界体性塔」と呼び、塔を大日如来の姿そのものと見立てて建立しようとしました。ただ、その創建に関しては明確ではなく、空海の存世中には完成を見なかったと言われています。

最澄は日本全国六カ所に宝塔・多宝塔（六所宝塔）を建立し、「法華経」各一千部を納められました。こちらも存世中に建てられたのは三カ所だけで、形状もはっきりしていません。

石造宝塔・多宝塔は、鎌倉時代に入ると、貴族や上流階級から武家や一般庶民へと仏教が広がり、それにともない多くの人がお墓や供養塔、逆修塔、納経塔として建立するようになりました。

○

では、ここから「宝塔」・「多宝塔」についてまとめたいと思います。

仏教が伝来した当初からある三重塔や五重塔の層塔に対して、宝塔・多宝塔は平安時代に出現した日本的な塔です。仏塔の起源はストゥーパであり、層塔は仏舎利の奉安を目的としたもの、つまり仏舎利が信仰の対象でした。しかし、宝塔・多宝塔は大日如来や法華経（経典）を奉安することを目的として建てられたものであり、崇拝の対象が塔そのものであることから、層塔とは必然的に性格が異なっています。ここで気をつけていただきたいのは、崇拝の対象が変わっても仏塔思想や本質が変わったということではありません。

以前の「おしえてお墓の話 石造美術オタクのひとり言」で述べさせていただいた五輪塔と宝篋印塔の仏塔思想、本質を思い出してみてください。第1回の五輪塔は、五輪塔そのものが大日如来であること、第2回の宝篋印塔は塔中に宝篋印陀羅尼経（経典）を奉安することによって、塔そのものが如来の功徳聚であることでした。

もうお気づきの方もいらっしゃるかもしれませんが、今回の宝塔・多宝塔と仏塔思想がそっくりだと思いませんか？

つまり、木造宝塔・多宝塔を造ること、石造宝塔・多宝塔を造ること、五輪塔を造ること、宝篋印塔を造ること、更には子供たちが小石を積んで塔を造ること、これらはいずれも功徳に違いはなく、仏塔思想、本質においても変わりはないのです。

○

まとめが仏塔全般になってしまいましたが、改めて死者救済・広大無辺の功徳を信じて造立される仏塔は、ありがたいというか格好良いというか。出来ることなら、このような仏塔思想、本質を伝えて、遠い先祖の願いを残せたらいいなと思う、今日このごろの石造美術オタクでした。

神恵院宝塔

今回ご紹介する宝塔は香川県観音寺市にある鎌倉時代中期の神恵院宝塔です。「琴弾宮絵縁起」に、該当すると思われる石造物が描かれています。基礎は大半が埋没しており、塔身の首部は二石、軸部が三石と輪切り状に分割された独特な形状をなしています。屋根は大きく扁平で、上端に低い露盤と降棟、軒裏には二段の垂木型を作り出し、相輪は伏鉢のみ残存しています。残存高は150㎝。石材は香川県さぬき市で産出される白色凝灰岩の火山石です。